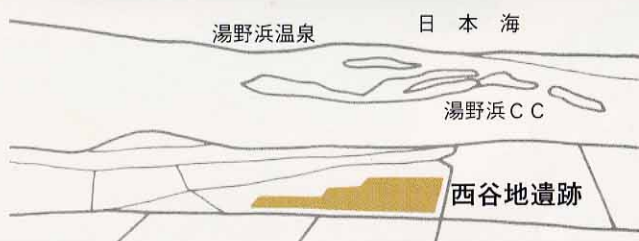


埋文やまがた



1996年1月8日

第3号



鶴岡市西谷地遺跡

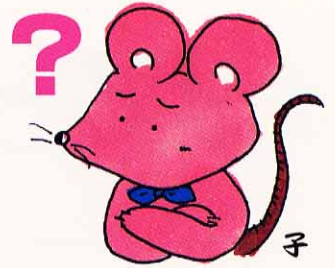
1995年8月8日遺跡の南東上空より撮影

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

YAMAGATA PREFECTURE ARCHAEOLOGY CENTER

〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301(代) FAX 0236-72-5586

発掘作業はどうやるの？



Q. 埋蔵文化財の発掘調査って実際はどうやるのですか？

A. 今回は調査方法の概要を鶴岡市西谷地遺跡の例で説明します。



調査の始めには、安全と成功を願っての鍬入れ式をします。



検出された遺構の輪郭りんかくに、石灰を用いて線引きます。



表土を取り去った後、ていねいに表面を削り、土の色や質の変化から昔の人の生活の痕跡（遺構）を探します。



トレンチ調査は人手で遺跡の深さや遺構遺物のありかを確認します。



道具は使いやすいように！便利鍬をグラインダーで切れるように研いでいます。

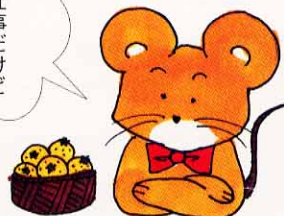


調査区が決まったら遺跡の表面を覆う土を取り去ります。主に重機械を用いて行います。



調査区内に方眼状くわいに杭を打ち地区割りをして地番をつけます。

大変な仕事だけど
ワクワクするね。



検出された遺構の輪郭にしたがって平板へいはん（測量器）で略測図を作ります。



ワー！
土器がたくさんある。

遺構に残っていた昔の人が
使った道具（遺物）が、
徐々に姿をあらわします。

遺構を掘り下げます。移植コ
テ・竹ベラなどで、当時の姿
をあらわすように慎重に作業
を進めます。



ここぞと
掘りますか？



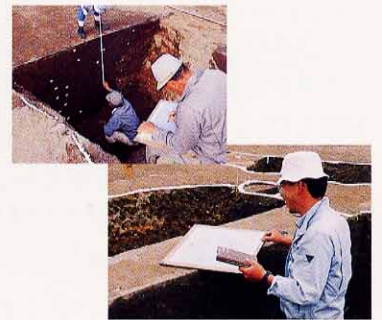
調査の成果について、関係の公所や地
元の方々に知っていただくために、調
査の終了近くに調査説明会を開催しま
す。



土の埋まり方をよく見て線を引きます。



平安時代の深い井戸跡です。



遺構の土の堆積の様子や平面の形・
遺物の出土した状況などを、図面に
取って記録します。



内面が真っ黒けな
土器です！



西谷地遺跡の調査スタッフです。ご苦労様でした。



説明にも力が入ります。



遺跡の広い範囲の遺構を正確に記録
するために、空中写真測量を専門業
者に委託することもあります。

遺跡トピックス

落合遺跡 (村山市・縄文時代)

遺跡は村山市の北部、沢の目川と最上川の両河川に挟まれた舌状の台地上に位置する、縄文時代中期中頃の集落跡です。

上半身ですが「土偶」が出土しました。残っている部分で体長79mmあります。目鼻がきちんと表現されているのが特徴です。舟形町西ノ前遺跡の「日本最大の土偶」と同じ時期のものです。

土偶とは素焼きの人形のことで、そのほとんどが女性を表現しています。お祭りやまじないに深い関係があると考えられています。

(渡辺 薫)



土 偶

下柳A遺跡 (山形市・古墳時代)

遺跡は市の北部、高瀬川扇状地の扇端部の低湿地に位置する、古墳時代中期の集落跡です。特筆すべき出土遺物として火鑽杵ひざりきねがあります。径7mm、長さ115mm残っており、先端が摩擦のため黒く焦げています。

古墳時代の火鑽杵は、これまで嶋遺跡(国指定史跡)からの出土が知られるだけでしたが、今年の発掘調査でより古い、新たな例が加えられました。

火鑽杵とは、キリ揉み方式で火を起こすときに用いる棒をいい、杵を受ける部分を臼うすといいます。

(尾形與典)



全 体



先端部 火鑽杵

荒川2遺跡 (米沢市・中世)

遺跡は米沢市の北部、塩野地区にあります。堀に囲まれた16世紀頃の館跡たてです。館内とその北側では、井戸跡が110基も見つかりました。堀跡と井戸跡の中からは下駄げだや曲げ物、中国製の青磁・白磁のほか多種多様な土器と陶磁器も見つかりました。

その中でも内側に取手がついた内耳鍋うちみみなべがあります。口径38cm高さ16.5cmあります。取手はつり下げたときに安定し、調理のじゃまにならないように二等辺三角形の頂点にあたる位置についています。外側は煤が付いて真っ黒になっています。

県内では米沢市の大浦C遺跡、上浅川遺跡でも見つかっています。青森県の浪岡城では同じ形をした鉄製の鍋なべが見つかりました。

(高桑 登)



内 耳 鍋

高瀬山遺跡に思う

山形市 鈴木 秀雄 (寒河江市三条遺跡作業員)

寒河江市の高瀬山には奈良時代の大変に大きな集落の遺跡があります。竪穴建物の中にはカマドの跡が見つかりました。今まで使用してたかのように、焼土が朱色のままに掘り出され感動したものです。

深さが3.5メートルもある井戸からは曲げ物やくり物が見つかりました。水汲み女が誤って手を滑らして落としたんだらうなどと、作業中に想像たくましい会話が弾みました。ここで井戸端会議をしていた寒河江女達はどこへ行ってしまったのだろうかなど話題はつきませんでした。掘り下げ作業は記録しながらのため一ヶ月近くもかかりました。途中で壁が崩れそうになり慌てて土留めをしたり、暑かったが中は狭いのでゴム合羽着たり苦労させられました。今ほどに道具のなかった時代にこのように立派な井戸が掘れたということは、いにしへの匠の素晴らしさに作業員皆で驚嘆したものです。

いつも調査説明会を聞いたり、発掘調査に従事していて感じることは、竪穴建物のことです。縄紋時代の竪穴建物は丸い形が多く、古墳時代からは方形に変わり、平安時代になりますとほとんどが方形に成っているようです。この高瀬山遺跡の平安時代の住まいでどんな人達がどんな生活をしていたのだろうかと思いを巡らしているとき、私はその時代に戻ったような錯覚におちいるものでした。

調査員の方からは、基本的には現在とあまり変わらない生活だったと説明を受けましたが、一千年のへだたりは計り知れない物があるように感じられます。当時は人と自然との調和を大切に生活のリズムを取っていたように思われます。

昨年はとにかく暑かった。汗は私の着るつなぎの服から噴き出し、滴り落ちながら地面に染み込んで

いきました。少々表現がオーバーでしたが、そのとき飲んだ水の旨かったことといったらありません。風呂上がりのビールなどより勝り、はるかに甘露の味と思ったものでした。

桃ノ木の木陰に休み、リンゴの木陰に涼を求めた一服の一時。暑く大変だったが毎日が充実した発掘作業だったと思います。

鍬かけや移植コテで遺構を掘り、遺物が土の合間から顔を覗かせた瞬間。そのときの感動といったら掘った者でなければ味わうことができません。それ故に文章にもできません、あしからず。しかし例えるならば松茸狩りで大きな山を当てたときよりはるかにトキメキがあります。

珍しい遺物が出土すると調査員の先生は作業員を集めて説明をしてくれます。それをネタに作業現場では話しの花が咲くこと咲くこと。

昨年は休日を利用して作業員の研修旅行で県立博物館、南陽市稲荷森古墳、うきたむ風土記の丘考古資料館と山形県埋蔵文化財センターを見学しました。引率の調査員の先生方からはとても丁寧な説明を受けました。特にセンターで一昨年に自分が今塚遺跡で発掘した土器の破片が、大きな壺に立派に復元されているのを見たとき、目頭に熱いものがこみ上げました。大変有意義で楽しい研修旅行でした。

現場打ち上げの時は司会役を仰せつかりながら、舞い上がってしまい調査員の方の隠し芸を紹介するのを忘れてしまったのが心残りでなりません。次回はいの一番に紹介しようと思っています。

ちなみに今年(平成7)は寒河江市の三条遺跡で発掘調査に挑戦しています。新しい発見に期待しながら。



高瀬山遺跡竪穴建物内カマド跡



寒河江市三条遺跡にて

中国観て歩き

調査第二課長 佐藤 庄一



初めての海外旅行は、1993年に山形で考古学を学ぶ人達とおとなりの韓国を訪れました。

異国に身を置き人々の生活に触れ、史跡を見学したその土地の食を味わうことによって、改めて日本人としての自分を理解することができたように思います。同行した人たちもその思いは同じらしく、これから二年に一回は外国の史跡旅行を計画しようということになりました。

そんなわけで'95年の夏は中国の史跡を訪ねる旅となりました。7月28日から8月2日まで、5泊6日の駆け足の日程でした。北京から洛陽、そして西安、最後に上海の史跡を廻ってきました。その中で特に印象に残ったことについて、いくつか紹介してみましよう。

入国して最初に戸惑ったのは物の値段です。「万里の長城」などの史跡や観光地では、日本人観光客とみると「シェンエン、シェンエン」と言いながら物を売りにきます。どうも「千円」のこころらしく、日本と比べると物価が安いので、思わず言い値の千円で土産品を買ってしまいました。

しかし私に続いて買った人は、値切って3個千円で買ったそうです。交渉次第では言い値よりさらに最低6割までは安くなるようです。失敗しました。遠慮せずに交渉してみることでですね。

夏といえば飲み物は麦酒ですね。中国でも麦酒（碑酒^{ビール}）は飲まれています。値段が売る場所によりまちまちなのです。缶麦酒がホテルの部屋の冷蔵庫に入っているもので250円、電車の食堂車では大瓶が35円、街の屋台では日本のように冷やしてはありませんが大瓶25円というしだいです。中国の一元が日本円の11円となります。

洛陽は日本の奈良にあたるような都市です。ここでは龍門の石窟がとくに印象に残っています。敦煌の莫高窟・雲崗石窟と並ぶ中国三大石窟の一つといわれています。全長1キロメートルにも及ぶ地域に1万休弱の石仏が続く景観はまさに圧巻です。けれども胴体そのまま残っているながら、頭がない仏像がいくつかあるのが異様です。売買のため心ない人々に切り取られたもので、いま所在を確認しているといえます。高皇町の蛭沢湖近くに凝灰岩の大きな石切り場の跡があります。ここに洛陽市と提携して壊された石仏群を何体か復元出来ないかなど思わず考え込んでしまいました。



龍門石窟の遠景



龍門石窟奉先寺北壁の天王・力士像



洛陽 白馬寺

西安は、唐の都「長安」があった都市です。城壁に囲まれた異国情緒あふれる街です。西安半坡博物館では川崎利夫氏のはからいで、館長の魏光さんとお話することができました。少し前に青森県の村越潔先生も訪れられたと聞きました。そのせいか青森県の三内丸山遺跡を手放しで誉めちぎります。

山形県にも西海淵遺跡という縄文時代の村全体がわかる遺跡がありますと図面や写真で説明しました。魏光さんがさらに興味を示し、日本にいてその遺跡が見たいといいます。けれども工事で大半が無くなってしまったと答えると、こんな大事な遺跡をなぜ壊してしまうのだとお冠です。これにはわたしも困って「日本は国土が狭いから、すべての遺跡は残せない」など冷汗ものの説明をせざるを得ませんでした。

しかし魏光さんは自らわたしたちにお茶を入れてくれるなど気さくな人柄で、高島町押出遺跡の彩文土器や住居跡の構造などを話した後、またいらっしやいといってくれました。



万里の長城



西安 東城門

西安の郊外には兵馬俑坑博物館があります。1974年の初春に井戸掘りの作業中、偶然に陶器の兵士や馬車などが発見されました。始皇帝の陵園にある巨大な兵馬俑殉葬坑でした。死後の秦始皇帝を永遠に守るために作られた兵士や馬の像6千余体は、それぞれ表情が異なり、等身大の迫力をもってわたし達に迫ってきます。この世界的な遺産は、いまも1～3号坑を覆ったドーム状の施設内で、発掘や復元作業が進められています。しかし三つの坑以外は調査経費がかさむため、今後の発掘調査のメドが立っていないという説明がありました。もったいなく、また残念に感じました。

来始皇俑馬開



一号坑内景



天安門広場にて

前回の韓国旅行では、韓国と日本の文化の密接なつながりと、反日感情も含めた国情の違いを感じてきました。

今回の中国旅行では、さらにスケールの大きい「文明」の一部をうかがい知ることができました。また旅の中で人々と直接言葉を交わす機会は少なかったのですが、垣間みた中国の人々の生活の躍動感にも大きな感動を得ることができました。機会があれば再度訪れてみたい国です。

埋文センターのうごき

調査遺跡の視察

寒河江市の高瀬山遺跡において山形県議会議員の視察が下記の日程でおこなわれました。

高瀬山遺跡は東北横断自動車道酒田線建設工事とともに、平成6年度から発掘調査がおこなわれています。これまでに旧石器時代後期から縄紋時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺跡が見つかっています。さらに平成8年度以降も発掘調査が続きます。

文教公安常任委員会

視察日時 平成7年10月11日(水)

10時30分～11時30分

視察委員 平 弘造 松浦安雄 今野良和
野川政文 井上俊一 渡部秀勝
後藤 源 (敬称略)

総務常任委員会

視察日時 平成7年10月24日(火)

15時05分～16時15分

視察委員 竹田重栄 奥山静枝 橋本喜久夫
和田広弥 土田 啓 (敬称略)



文教公安常任委員会視察



総務常任委員会視察

保存科学基礎課程研修に参加して

調査研究員 植松 暁彦

1995年11月7日から17日までの2週間、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの「保存科学基礎課程」研修に参加してきました。

早秋の奈良はようやく木々に赤色がつき始め、古都の景観が赴き深くなりだした頃でした。

「保存科学」は遺跡から出土した土器や木製品、金属製品を保存するにあたり、遺物自体から知り得

る情報を探る学問です。さらには長い間土中に埋もれボロボロになってしまった遺物をどうする方法で修復し、守っていくかを考える学問でもあります。

具体的な例として、顕微鏡で漆塗りのお椀の塗られた回数や顔料には何が使われているかを調べて、漆技術の時代や地域の共通点を見つけたり、錆びに被われた金属製品にX線を射て、当時の形を傷つける事なく復元したりします。

山形県では年々遺跡の発掘調査が増加し、たくさん貴重な出土遺物が見つかっています。しかし、「保存科学」といった分野においては本県はまだまだ遅れをとっています。このため将来はこの研修を通して学んだことを生かし、新たな古代の風景を復元したいと思います。

■ 編集後記 ■

🍏 あけましておめでとうございます。上山も雪のお正月でした。センターも'96年を迎え設立4年目となります。「感性豊かな教育と文化の創造」にむけて本誌もその一助となるよう努力して参ります。(郊)



木製品保存処理研修風景